

Encourage & Company

皆さんこんにちは。

エンカレッジアンドカンパニーの堀です。

私のコラムでは、中国の故事成語について、我々の日常に何か応用できないか、という観点で、シリーズとして書き綴っています。

第1回目は「牛耳る」という言葉についてお話しました。

第2回目は「鳴かず飛ばず」。

今回第3回目は故事成語ではなく歴史上の人物にフォーカスしようと思います。

中国の三国志トランプの JOKER は諸葛亮孔明と司馬懿仲達。

三国志ファンなら2人が JOKER であることに妥当な感覚を持ちます。

今回は司馬懿仲達についてお話したいと思います。

話の前提の「名士」について。

孔明と仲達の社会システム上の地位は「名士」と呼ばれる支配階層です。

この「名士」は我々の言う地元の名士とはだいぶ意味合いが違うので注意が必要です。

「名士」とは、知識人の間で名声を得て、それをもとに地域社会で支配階層を形成する人々である。また、「名士」は君主に対して絶対服従の君臣関係を必ずしも持っていない。君主の不当な命令に従えば「名士」を成り立たせている名声が地に落ちてしまうこともあるからである。

- ※ (1) 呂布は三国志の中で最も高い武力を持ちながらも根拠地を一度も確立することができなかったのは、名士を尊重しなかったからと言われています。
- (2) また劉備は名士である孔明を三顧の礼で迎え、初めて根拠地である蜀を確立できました。
- (3) 劉備は死に際し、自分の息子が君主の器でなければ君が自ら君主となりなさいと孔明に言ったのは、あまりに「名士」の力が強大になりすぎることを阻止するために釘を刺す言葉だったとも研究されています。
それほど社会システム上の地位として「名士」は重要な役割を果たしました。

絶対服従の君臣関係を必ずしも持っていないという点がこの時代を難しくさせた点だと

私は考えています。

曹操と仲達の間柄は、君主と名士の微妙な関係が如実に出ているので紹介します。

- ・ 仲達の才能を聞いた曹操は出仕を求めるが、仲達は曹操に仕えることを望まず、仮病を使い辞退した。
曹操は頭にきて刺客を放って「もし驚いて逃げるようであれば殺せ」と命じたが、仲達は臥して動かなかったために難を逃れた。
- ・ 曹操は仲達について「司馬懿は誰かに仕えるような男ではない」と評した。
- ・ 仲達は丞相の上に位置する名誉職の「太傅」に任命、つまり左遷されていた時がある。

当時であれば君主に諫言(目上の人への過失などを指摘して忠告すること)しようものなら一族郎党根こそぎ誅殺されてしまうにも関わらず、仲達が危険視されつつも危機回避できたのは、仲達の力が絶大であったからだと私は考えています。

つまり曹操が殺したくても殺せない力のある名士だったのでしょう。

三国志ファンでなければ三つの国がどんな顛末になるのかあまり知られていないと思います。まず最初に蜀が魏によって滅ぼされます。そして魏はなんと司馬懿仲達がクーデターを起こし、西晋という国に変わってしまいます。そして西晋が呉を滅ぼし中国を統一します。そして名士にとって有利な社会システムを構築してゆきます。

え!?司馬懿仲達が三国志の究極の勝者では?

そうです、曹操には殺されかけ、孔明のライバルだけど悪役ライバル、なんかいいことなしですが、最後は自分とその子が中国統一してしまうのです。

曹操の言う「司馬懿は誰かに仕えるような男ではない」はまさにその通りになったんです。

曹操は中国統一できなかったけど、司馬懿仲達はできた。

私の最初の動機、三国志の登場人物の生き様をビジネスに応用する、という観点から曹操（経営者）と司馬懿仲達（従業員のちに経営者）の関係は非常に興味があります。

堀 洋三